

五十七年分の街

沖繩に住むわたしたちは、数百年もの歴史をもっていた街や建築を戦争ですべて失った。だから今、沖繩の街や建築の歴史は戦後の五十七年分しか「見えないう」。残念ながら日本のどの地域よりも短い。一方、ヨーロッパの街

は、街そのものが博物館のようで、古い集合住宅も多く、中には数百年の歴史をもつ建物

もある。また、外観は古びていても、内部はすぐモダンに改装して住んでいる。人々は、古い建物に住むことに誇りをもっている。

ドイツ・ベルリンの郊外、中心市街地から地下鉄で三十五分のと



▲各住戸のバルコニーはタイルで縁取りされ、壁はブルーにペインティングされている。そして、いつもそこには美しい草花が飾られている

◀ドアや窓は木製で、さまざまな色で彩られている。これまで、大切に維持管理されてきたことをうかがわせる

誇り持てる建物

ドイツのブリッツ・ジードルング団地を例に



▲馬蹄形をした5階建ての住棟に囲まれた広い芝生の中庭



▶竣工当時(1930年ごろ)の団地の空撮写真。馬蹄形の住棟が団地の中心となっていることが分かる

約百三十メートルの広い中庭がある。樹木も少なく遊具もない、人が集まる広場でもない、この団地や住民のハートを感じさせる大切な空間である。ここを訪れると、だれもが自分の懐かしい故郷に帰ってきたかのように感じる。そして、草花で美しく飾られたバルコニーからは、友人や隣人のように住民が手を振り出迎えてくれる。

フラインド
感じる住戸

住棟はレンガ造で半地下に倉庫、その上に三層の住戸、そして最上階の五階には、以前は乾燥室だった倉庫がある。間取りは基本的に3L2Kタイプで、部屋の形や大きさは少しずつ異なり、家族のライフステージの変化により部屋の使い分けができるようになっていく。室内面積も六〇㎡ほどで意外に小さく質素で、日本の古い団地とさほど変わらない。この建物は、当時で

協同作業が生んだ団地

生んだ団地

この団地が建築されたのは第一次大戦後の深刻な住宅不足のころ。十九世紀ドイツの厳格な家賃規制や都市計画の中で、敗戦後の社会

民主主義やユートピア的考えから、新しい街や住宅を夢見て実現した。企画者と設計者、住民による協同組合が中心となり、議論しながら「総合的な都市の単位」として建設され

た。



タウトの著作「ジードルング覚書」には、団地の建設経緯やエピソードがたくさんある。住宅を求める住民と企画・設計者が悪戦苦闘しながら団地をつくっていく。予算がないから住民自らが労働を提供したり、工事費削減のために途中で設計を変更したりしながら建物ができ、その後大切に維持管理し住み続けてきた。ブリッツ・ジードルングのような集合住宅のある都市に住むには、やはり主体性のはっきりとした非常営利協同組合の存在と、その中で議論を多く重ね、共同作業をしていくことが今こそ必要ではないだろうか。

次回は、集合住宅の住み方について述べる。(チーム・ドリーム代表)